

「医療に携わる限りは開業医」との院長・中島敏雄氏の思いが具現された中島クリニックが開業して半年余りが経過した。予約制・電子カルテを採用し、待ち時間はほぼないといつていい。地域に密着し、患者に対して十分な診療時間を確保する一方で、専門性を高めるための臨床の研修にも日々努めている。

キーワード……ホームドクター、地域密着、専門性



“ちょっと頼みたい 地元のお医者さん” を実践するために

中島クリニック(兵庫県西宮市)

院長 中島敏雄氏

一般家庭に育ったため、中島敏雄氏自身の医師像は、いわゆる“町のお医者さん”。長期的開業プランは学部半ばで決めたが、特にある時点では開業医になることを決断したわけではない。医療に携わる限りは地域に密着した形で、との思いを実践した結果が開業だった。中島氏は開業にあたり、専門分野である消化器に関しては、内視鏡手術、インターフェロン治療など、専門病院レベルの医療水準を確保したいとの意向を持つていた。そのために必要な高額な高度医療機器などの設備資金と技術を持つ職員が概ねそろい、開業への気力を充実した時期が、中島氏の場合、30代半ばだったのである。



開業地は、地域医療を実践する上でも、生まれ育った故郷にこだわりがあった。幸い小型スーパー駅1ヶ所2店にはさまれた地域住民の往来が多い土地を見つけることができていた。

さて、具体的な準備を始めたのは、開業の半年前になつてからである。クリニックの建物について、

この時期は、電子カル

4月で3回目を迎えた院内講演会は無料。市民の知識を広めて自分の体や健康を考えほしい、講演をする中島氏自身が勉強を続ける環境を持ちたいと開いている。

クリニック入り口(夕景)。温かみのある照明が気持ちを和らげる。



クリニック外観。いかにも病院然としておらず、中島氏の考えである「気軽にちょっと診てもらえる」という雰囲気がある。

準備期間

中島氏が考えていたことは、

「診察は待合室から始まります。

来院時は健康な状態ではないため、安らぎを与える緑、柔らかい間接

照明など、入り口・待合室に安心

の空間が必要です」。

そのため、外観や入り口の大ま

かなデザイン、待合室の雰囲気などは既存の建物を自分の目で見てまわる。また、デザイナーのハマ

ダシンヤ氏(セブンスターズ・デザインスタジオ)に相談しながら理想との折り合いをつけ、1つひとつデザイン案を固めていった。

こうして、建築工事に入ったのは開院4ヵ月前、電子カルテ設定を始めたのが2ヵ月前だった。中

島氏が開業を振り返つて、最も大変だったのは、開業前の2週間だったという。

4月で3回目を迎えた院内講演会は無料。市民の知識を広めて自分の体や健康を考えほしい、講演をする中島氏自身が勉強を続ける環境を持ちたいと開いている。

実際に開業してみて

開院に際し、広告などは一切出さず、ホームページを開設しただけだった。その理由は、

「院長の顔が見えてこない情報だけだつた。その理由は、

テの最終的な運用試験といったハード面、従業員の教育などのソフト面、その両方の準備に追われた期間であった。



けの広告は不要。口コミで自然に、少ししつ浸透すればいいと思っています」
開業当初の患者数は1日数人程度だったが、現在は30人前後で、診療時間は1人当たり10~15分を確保している。患者とゆっくり向かい合いながら説明ができる、自分の診療方針や治療法を患者が納得しているという実感もある。

クリニックでの診察だけをしていると、情報が限られてしまう。そこで、昼夜みを利用して、他科医師と合同で開かれる症例研究会などにも極力参加しているそうだ。

同院にはAAA(トリプルA: "Amenity, Accessibility, Ability")というスローガンがある。

"Amenity"とは、快適さだ。いかにも病院という雰囲気では、緊張して検査値が正常値と異なる場合もある。中島氏は「道から入ってきて歩いていたらそこが診察室だった」という雰囲気づくりを意識したという。

"Accessibility"は、アクセスの良さである。往診の依頼があれば、すぐに電話で場所を確認し、自転車で患者宅に向かっている。

そして、"Ability"は、専門性だ。医療器具や更新される情報は、刻々と進化を遂げている。紙媒体だけでなく、インターネットやメーリングリストなどからもしっかりと情報を取捨選択して、最先端の医療を実現しているこうと取り組んでいる。

また、このク

リニックでは、電子カルテ導入の検討がさらに多くなってくると考えられる。このことについて、中島氏は、こう語る。

特に開業前には、内装、機器の導入、動線の設計、電子カルテの設定など、医療行為の前後周辺に関する非医療的な事柄を自らが整理していくかなければならないが、「医療とは関係ない煩雜な事務処理としか考えられないか、少しずつ自分の職場が充実していく満足感と感じられるかが、開業医に向いているかどうかの判断基準になるかもしれませんね」と中島氏はアドバイスする。

緑や間接光、少し抑えた白を用いた待合室。



最新鋭の内視鏡（オリンパスEVIS LUCERA）を導入。ベッド脇にも患者用モニタを備え、検査中でも説明ができる。



診察室。下には院内LAN用のサーバやHD、レーザプリンタなどが並んでいる。

車で患者宅に向かっている。

診察風景電子化されたデータ（左画面）を見ながら説明し、その写真や症状の要点を手書きしたものも患者に手渡す。右画面は電子カルテ「ダイナミクス」。



開業後、痛切に感じたのが情報流通の乏しさである。勤務医時代には、特にカンファレンスを開かないでいるが、現在は30人前後で、診療時間は1人当たり10~15分を確保している。患者とゆっくり向かい合いながら説明ができる、自分の診療方針や治療法を患者が納得しているという実感もある。

クリニックでの診察だけをしていると、情報が限られてしまう。そこで、昼夜みを利用して、他科医師と合同で開かれる症例研究会などにも極力参加しているそうだ。

また、木曜午後を休診日とし、専門性を高めるため、救急病院に勤務して臨床の研修にも努めている。

ここが特徴

子化している。その一方で、患者には紙に手で書かれたもののほうがわかりやすく記憶にとどまりやすいと、病状説明の際には、その要点を手書きしたものも患者に手渡している。

中島氏は、「内科は広範に、専門の消化器はより深く」という診療方針を掲げている。特に、専門分野に関しては、内視鏡手術、インターフェロン治療など、専門病院レベルの医療水準を実現するため、内視鏡、超音波診断装置、内視鏡洗浄機など、大学病院にも劣らない最新の医療設備を導入しているのである。

アドバイス

特に開業前には、内装、機器の導入、動線の設計、電子カルテの設定など、医療行為の前後周辺に医療器具や更新される情報は、刻々と進化を遂げている。紙媒体だけでなく、インターネットやメールなどからもしっかりと情報を取捨選択して、最先端の医療を実現しているこうと取り組んでいる。

また、このクリニックでは、電子カルテ導入の検討がさらに多くなってくると考えられる。このことについて、中島氏は、こう語る。

中島クリニック

- 開業日／平成15年10月1日
- 標榜科目／内科、消化器科
- 開業形態／戸建て
- スタッフ数／医師1人、看護師4人、事務員4人
- 所在地／〒663-8003兵庫県西宮市上大市3-1-10
- TEL.0798-57-5170
- FAX.0798-57-5171
- URL <http://www.nakajima-clinic.com/>

文と写真・西本 庄一

「私の場合は、準備期間として2ヵ月の時間を割きました。車などは納車されればすぐその日に使えますが、私が導入した『ダイナミクス』は、自分が使う薬など、さまざまな項目の登録から始まって、システム全体の構築まで、多くの登録・設定が必要です。そこからやっと使い始められるわけですが、やった認識がないと、大変なものを入れてしまつたと途方に暮れることもあるかもしれません。逆にきめ細かな登録、設定ができる電子カルテだからこそ、一旦設定が完了すれば、自分の診療スタイルに合った最高級オーダーメード電子カルテに変身しますよ」

今後の診療については、「顔見知りの患者とひざを交えて診療方針などを話し合い、次回の診療のとき、顔色を見ることが薬しみに思われるかどうかも、開業医の資質の一つでしょう」。このクリニックで、さらに気軽に診察を受けられる患者が、今後ますます増えていくのだろう。